

これからの防災教育は どうあるべきか

大津波から生き抜いた
釜石市の子どもたち、その防災教育に学ぶ



群馬大学大学院教授・広域首都圏防災研究センター

片田敏孝

はじめに

二〇一一年三月十一日の東日本大震災は、約一
万九〇〇〇人の死者・行方不明者を出す未曾有
の災害となった。犠牲者の死因のおよそ九割が
津波による溺死だと言われている。我々の記憶
には今なお、圧倒的な破壊力でまちや住民を襲
う津波の映像が脳裏に焼き付いて離れない。

このような状況にあつて、私が小中学生の津

波防災教育に関わっていた釜石市では、学校管
理下になかった五名の児童生徒を除いて、市内
の全小中学生およそ三〇〇〇人が全員無事に生
き延びた。この事実から、我々は何を学び、そ
して将来必ずや起こるであろう巨大災害にどう
備え、対応していけばよいのか。私が釜石市で
実施してきた防災教育の内容とポイントを整理
するとともに、従来の防災教育の問題点とこれ
からの防災教育に必要な視点について、考えて
いきたい。

一 大津波から命を守り抜いた釜石市
の子どもたち……津波から命を守る

「避難三原則」

今回の大津波災害による釜石市の死者・行方
不明者は約一〇〇〇人に上る。しかし、一方で、
病欠等で学校の管理下になかった五人を除く小
学生一九二七人、中学生九九九人は全員無事だ
った。彼らは、学校での津波防災教育の教えに
従って主体的な対応行動をとり、大津波から自
らの命を守り抜いたのである。

子どもたちが状況を的確に判断し行動に移す
ことができた背景には、私が二〇〇四年から釜
石市の子どもたちに対し行ってきた津波防災教

育が、少なからず影響を与えていると考えてい
る。その中で私が子どもたちに教えたことは、
津波から自らの命を守るための「避難三原則」
である。

(一) 想定にとらわれるな

学校の津波防災教育で、まず子どもたちに教
えたことは「想定にとらわれるな」「端的にい
えば「ハザードマップを信じるな」ということ
である。子どもたちは学校で、先生の言うことや
教科書に書いてあることは正しいという知識獲
得型の教育を受けてきており、これは従来の教
育にはないスタイルと言えよう。

鶴住居小学校では、学校には色が塗られてお
らず、津波の浸水想定区域から外れているのを
見た子どもたちが、「学校はここにあるから安心
だ」「自分の家は大丈夫だ」などと二喜一憂して
いた。そこで私は、「ハザードマップどおりの津
波がこの次来るとは限らない。相手は自然であ
り想定外のことも起こり得る。そう考えると、
たとえ学校が浸水想定区域から外れていたとし
ても、大丈夫と考えるのは大変危険ではないか」
と問いただした。子どもたちに自らが想定にと
らわれていることを自認させること、そして
相手は自然であり、時として、人間の勝手な想
定にとどまるものではないことを理解させたか



震災当日の避難のようす
(鵜住居地区住民が撮影)

ったからだ。すると、子どもたちは「そうか。小学校も中学校も色が塗られていないけれども、必ずしも安全ではないんだね」と言ったのである。私はこの一言を聞いたとき、子どもたちは私が伝えたかったことを正しく理解してくれたと確信した。

(二) その状況下で最善を尽くせ

二つ目は、「その状況下で最善を尽くせ」。「ここまで来ればもう大丈夫」と考えるのではなく、そのときでできる最善の行動をとれ、ということである。「最善の行動」とは、これ以上もはや何とできない、対応できる全ての行動をとること

である。ここでは、釜石東中学校の子どもたちがとった行動を紹介したい。

二〇一一年三月十一日、約五分に及ぶ激しい揺れが続いた後、釜石東中学校の副校長先生は校内放送で避難を呼びかけようとしたが地震による停電のため放送が使えなかった。

しかし、地震で揺れている最中から、校庭で部活動をしていた生徒たちは、「津波が来るぞ、逃げるー」と校舎に向かって大声で叫びながら校庭を駆け抜けていた。中学校の他の生徒もこれに続いた。一方、隣接する鵜住居小学校の子どもたちは校舎の三階に避難しようとしていた。しかし、日頃から一緒に避難訓練をしていた中学生が一齐に避難する様子を見て、小学校の児童らは校舎を駆け下り、中学生の後に続いた。

こうして子どもたちは無事、予め避難先に指定していた老人介護施設「ごいしよの里」に到着した。しかし、施設脇の崖が崩れかけている様子や、津波が防波堤にあたって舞い上がる水しぶき、津波が家々を壊す土煙を見た中学生が、点呼をとっている先生に「ここじゃだめだ」と言ってさらにその先の高台にある老人福祉施設へ避難することを進言した。再度全員で避難する途上、中学生は近隣の保育園から園児を連れて避難する保育士たちを手伝った。そして中

学生らが避難する様子をみた近隣住民が、それにつられてともに避難した。無事全員が老人福祉施設に避難し終えたそのわずか三十秒後、津波は老人福祉施設の目前まで迫り、そこで止まった。迫り来る津波をみた子どもたちは、そこからさらなる高台をめざしたのである。もしハザードマップの想定にとらわれて学校や最初の避難場所に留まっていたならば、とても生き延びることはできなかっただろう。

子どもたちは「想定にとられるな」「その状況下で最善を尽くせ」との教えを忠実に実践し、大津波から命を守り抜いたのである。

(三) 率先避難者たれ

三つ目は「率先避難者たれ」。まず自分の命を守り抜くことに全力を尽くせ、ということである。自分が真っ先に逃げることは、子どもたちにとって大きな抵抗感があり、なかなか受け入れられないことである。そんな子どもたちには、「率先避難者たれ」の真意を説いた。

「人間はいざというとき、なかなか逃げるという決断ができない。例えば、火災の非常ベルが鳴っても、逃げずに周りの様子を見て留まっているだろう。非常ベルの意味は皆わかっている。しかし、逃げるという意思決定をできずにいるのだ。津波の場合、避難を躊躇していたら皆そ

の犠牲になってしまう。自分が「率先避難者」となりいち早く避難すれば、周りの人も危機を察知してつられて逃げる。こうすることによって、皆の命を救うことができる。」

今回の津波でも、大挙避難する小中学生を見て避難した住民も多かった。率先避難者となった子どもたちは、周りの大人たちの命までも救ったのである。

二 これからの防災教育はどうあるべきか

(一) 従来の防災教育は、何が問題だったのか
改めて、釜石の子どもたちが大津波から生き延びるためにとった行動を振り返ると、彼らには、自らの命を守るために自ら判断・意思決定し、行動する「自然に向き合う姿勢」が備わっていたことがわかる。

しかし我が国では、防災はもとより教育、ひいては社会全体が物事の判断において主体性を欠いた状態にある。災害時であっても、自らの命を守ることすら指示待ち状態で、しかも避難勧告が発表されてもほとんどの住民が避難しない状況が各地で見受けられる。それは、我が国の風土や国民性に起因する部分もあるが、これまでの教育が、画一的な行動様式を教えること、考えることよりも知識を詰め込むことに注力し

てきたこともあり、子どもたちに自ら判断し主体的な行動をとることを求めてこなかったことが背景にある。そしてそのまま、行政主導の防災に自らの命までも委ねてしまうような、主体的な行動をとることができない大人になっていったのである。災害対応においては、自らの判断が命に直結することになり、状況に応じて迅速に確な判断をし、指示を待たずに主体的に行動することが、命を守る上での必須条件となる。

(二) 主体的行動を導く「姿勢の防災教育」

では、釜石市の子どもたちに実施してきた防災教育は、端的に言えばどのようなものだったのか。

これまで行われてきた防災教育の一つは「脅しの防災教育」である。「過去にこんな恐ろしいことがあった」といつて災害に対する恐怖を喚起する、いわゆる「恐怖喚起コミュニケーション」に基づくものである。しかし、これは相手を脅すだけであり、あまり効果は得られない。例えば、運転免許証の更新の際には、交通事故の写真は何枚も見せられる。帰りの運転中は今にも人が飛び出してきそうな気がするが、翌朝には元通りに戻っている、といった経験は誰しもお持ちだろう。人間は怖いと思う気持ちを持

続することはできないし、ましてや自分の死を想起して生きていくことなど到底できるものではない。

もう一つは「知識の防災教育」である。典型的な例はハザードマップを配って、「浸水が想定されている範囲の人は気をつけましょう」と教えるといった具合である。ハザードマップも、その作成の前提を知ったうえで活用すれば有効なツールとなる。しかし、単に知識として与えられるだけでは、災害イメージの固定化を招き、それ以上のことが起こり得ることを想起できなくなる。すなわち、「想定にじばられる」ことになってしまうのである。

これに対し、釜石市で実施してきた防災教育は、災害から自らの命を守る主体性を醸成する、いわば「姿勢の防災教育」である。私が防災教育で子どもたちに伝えなければいけないと考えたことは、敵は津波ではなく、己である、ということである。人間は災害に対峙したとき、今が非常時とは思わることができず、自らの命が危険にさらされている状況を受け入れることができないものである。つまり、「逃げない」と意思決定をしているのではなく、「逃げる」という最後の意思決定をできずにいる。この決断の躊躇が、避難のタイミングを逃し、逃げ遅れ死んで

いくのである。だから、子どもたちには、まず己を知り、自然災害に向かい合う正しい姿勢を伝えることが重要になる。「姿勢の防災教育」で重要になるのは、相手は自然でありどんなことでも起こり得るということである。「大いなる自然の営みに畏敬の念を持ち、自らの命を守ることに主体的たれ」。まさにこれが、私の防災教育の根本理念である。

「避難三原則」はまさに「姿勢の防災教育」を具現化したものであり、相互に整合的である。「①想定にとられるな」は、ハザードマップに象徴される「知識」によって固定された災害イメージを打破することに他ならない。相手は自然であり、どんなことでも起こり得ると考えるべきであり、想定を超えた、超えないといった、人間がいわば、勝手に設定した災害の固定イメージにとられることは、自然災害から命を守るという観点においては、危険なことと言えよう。

「②その状況下で最善を尽くせ」は、自らの命を自らの手で守るためにあらゆる手を尽くすという姿勢そのものである。人間が自然を完全に制圧することなどおこがましく、大いなる自然に畏敬の念を持ち、どのようなことがあっても自然の振る舞いを受け入れなければならない。

それは、時によっては、最善を尽くしたとしても、自然が人間の対応力を上回れば死ぬかも知れないことを意味しているが、それは仕方がない。最善を尽くして自然の前に屈するのであれば、それも自然な姿だと解釈すべきである。しかし、ほとんどの場合は最善を尽くしていれば助かるのだから、何事にも常に一所懸命に取り組む姿勢を涵養することが重要である。

「③率先避難者たれ」は、一見、「自分だけが助かれればよいのか」と思われがちだが、自分の命が守られてこそ、他の人の命を助けることができるということ、また、周りの様子に左右されず、いち早く率先避難することが集団同調を生み、結果として多くの人たちの命を守ることにつながるという実効性ある避難の考え方である。

「姿勢の防災教育」に基づく「避難三原則」の真意を正しく理解することこそが、すでにカウントダウンが始まっている次の災害に適切に対処する上で必要なのではないだろうか。

おわりに

私は、今のような主体性が欠落した社会状況を何よりも改善していくことが必要と考えているが、既成概念のできあがった大人を正してい

くことは非常に難しい。したがって、私は、学校での防災教育に力を注ぐべきと考えている。「子どもたちの命を守る」というキャッチフレーズは社会的な合意が得られやすく、子どもたちの親を巻き込み、さらには地域にも波及していくことができる。

また、子どもは大人の背中を見ながら育つ。親の背中、社会の有り様、その中で常識をつくり上げていく。避難勧告が発表されても避難しない大人を見ている子どもたちが、避難する大人になるはずがない。だからこそ、子どもたちの防災教育が重要になってくる。子どもが大人になり、親になるまで十年、二十年という年月を費やして地道に防災教育を行い、学校、家庭、地域との関係の中で、地域に受け継がれる「防災文化」をつくっていくことが必要であると考えている。

そのためには災害大国と言われる国にふさわしい防災教育が必要であり、防災専門の教科を創設し教育カリキュラムの中に明確に位置づけていくことも必要であると考えている。このことは私が委員として参加した中央教育審議会の検討の場で強く申し上げたことで、答申にも盛り込まれた。すぐには難しいかもしれないが、いずれ具体的に検討されることを期待したい。